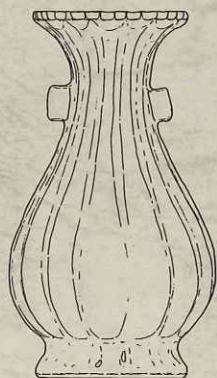


特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡 33

平成 13 年度発掘調査・環境整備事業概報



福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館



第112次調査区全景（南から）



第112次調査出土青磁瓜形瓶（正面・背面）

特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡 33

平成 13 年度発掘調査・環境整備事業概報

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

序 文

一乗谷は昭和42年の発掘開始からはや35年経ち、節目の年を迎えました。毎年少しずつではありますが発掘調査と環境整備の事業を実施してきました。「継続は力なり」の言葉どおり、国・県・市・地元の四者がスクラムを組んで来た成果は大きなもので、一乗谷への入り込み観光客も今では30万人を越え40万人に届くほどになりました。

これも偏えに、これまでの関係機関や関係者をはじめとして各位のご協力と先輩諸賢のご努力の成果の賜物と厚く感謝しているところです。

さて、今年の発掘調査事業は復元町並地区の北部、八地谷口で、遺構として大小の道路に面した武家屋敷2区画、町屋敷3区画を、遺物として優れた舶来陶磁器や石製一部金箔貼灯籠を検出しました。改めて一乗谷城下町のしっかりした都市区画や高い文化を理解しました。

一方、環境整備事業は、瓜割清水周辺と朝倉景鏡の館跡とを実施しました。前者の清水は今なお豊富な湧水がみられ、いやしの空間となっています。後者の館跡は大野郡司を勤めた同名衆の筆頭クラスですが、逆臣として有名で悲惨な最後を遂げています。戦国の世の事跡を語る格好の場所の誕生です。いずれも史跡来訪者に喜んでもらえるものと確信しています。

最後になりましたが、今後とも関係機関や関係者各位のご指導、ご協力を得て、厳しい経済環境の中、知恵を出し合って一乗谷朝倉氏遺跡の顕彰に努めていきたいと思っていますので、よろしくお願いします。

平成14年3月

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
館長 青木豊昭

例 言

1. 本書は、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館が平成13年度に実施した国庫補助事業による発掘調査、および環境整備事業の概要報告書である。
2. 本年度は、「発掘調査・環境整備第2次中期10ヵ年計画」の第5年次にあたる。本書は、第112次発掘調査の成果、および第68次調査地中惣・第106次調査地割流整備工事の概要について収録した。
3. 本書の作成にあたっては、資料館員の検討・討議を経て、宮永一美が編集を担当した。また、執筆については、各項目毎に分担し文末に文責を記した。

目 次

巻首図版

序文

例言

目次

1. 平成13年度の事業概要	3
2. 第112次発掘調査	7
遺構	7
遺物	11
3. 環境整備	18

第1図 平成13年度発掘調査・環境整備位置図

第9図 第106次調査地割流整備図

第2図 第112次発掘調査位置図

第10図 第68次調査地中惣整備図

第3図 第112次発掘調査遺構全測図

第11図 整備建物跡寸法図

第4図 第112次発掘調査遺構模式図

表1 平成13年度事業概要一覧

第5図 第112次発掘調査出土遺物(1)

表2 第112次調査出土遺物一覧

第6図 第112次発掘調査出土遺物(2)

挿図1 青磁瓶・青磁瓜形瓶写真

第7図 第112次発掘調査出土遺物(3)

挿図2 石灯籠模式図

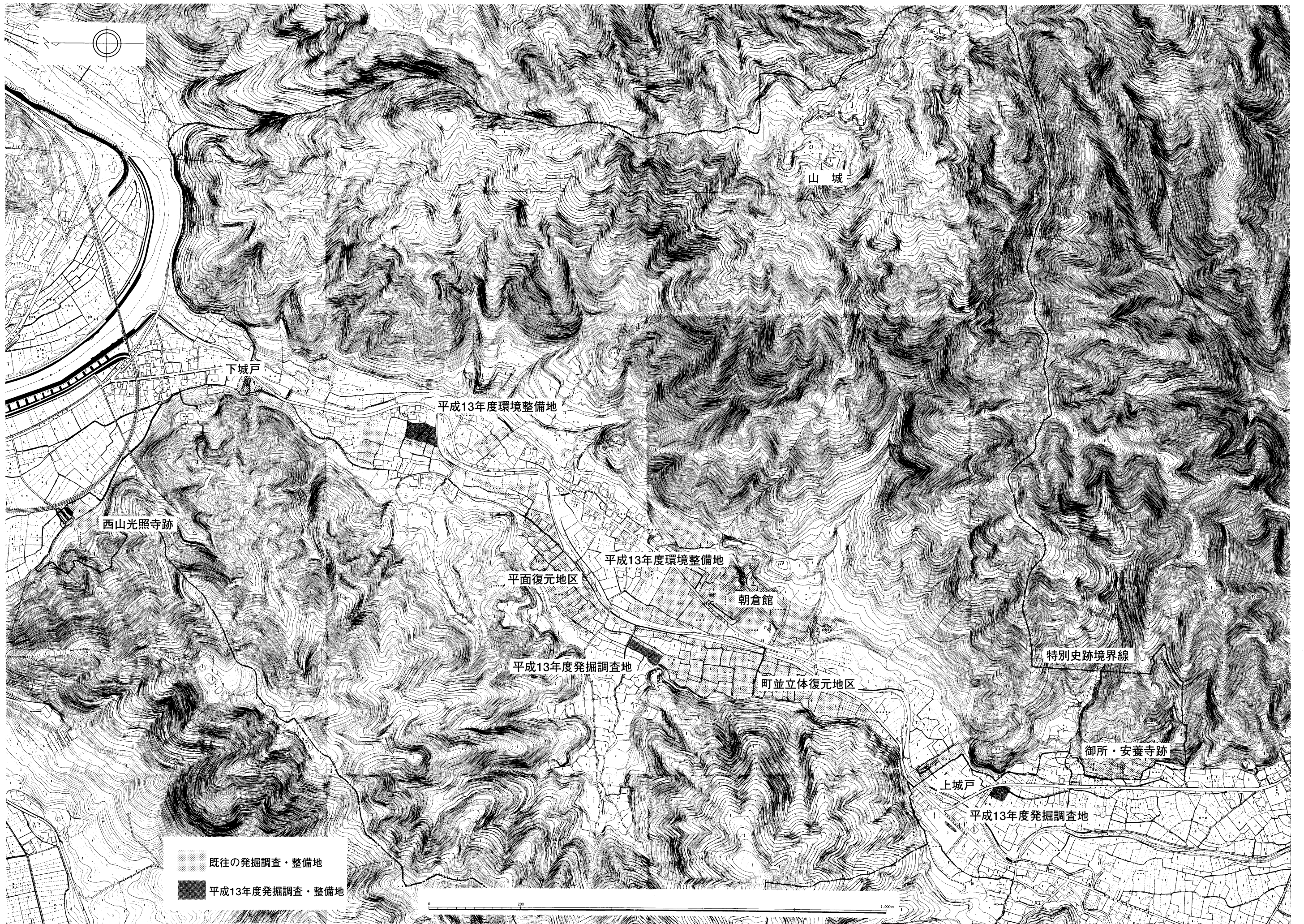
第8図 第112次発掘調査出土遺物(4)

挿図3 石灯籠出土状況写真

図版 第112次発掘調査遺構 PL. 1 ~ 4

 同 出土遺物 PL. 5 ~ 7

 第68・106次調査地整備工 PL. 8 ~ 11



第1図 平成13年度発掘調査・環境整備位置図

1. 平成13年度の事業概要

本年度の前半期は、中山間地域総合整備事業に伴う発掘調査を実施した。上城戸外側、第28次発掘調査区の南隣に位置する1,000㎡を発掘した。面積が限定されていたため、全体の様相は把握できなかったが、比較的大きな屋敷跡と想定される区画の一部を検出した。比高差約0.6mを測る上層・下層面を検出し、上層からは直径0.3m～1.2mを測るピットを、下層からは長さ23.5mにわたる溝を検出した。その他、石敷遺構を検出した。また、福井市立一乗小学校校庭内の150㎡を発掘した。調査範囲が狭小であり、一乗谷川の氾濫により削平を受けているため、遺構配置などの全容は確認できなかったが、蔵跡と考えられる石敷遺構を検出した。

本年度の後半期は、国庫補助事業により計画調査の第112次調査を実施した。調査地区は一乗谷川の西側、八地谷扇状地の裾野に位置する。南は斎藤兵部少輔など有力武将の屋敷が並ぶ地区に接し、東は赤淵・奥間野地区と平井地区を結ぶ南北道路に面する。八地谷地区は通称「八地千軒」とも呼ばれ、従来から中小規模屋敷の集住する地区と推定されてきたが、発掘の結果、武家屋敷2区画のほか南北道路から八地谷へ入る東西小路と、それに面した町屋3区画が発見された。

環境整備は平成2年度に発掘調査した第68次調査区（中惣地係）2,000㎡について整備工事を実施した。また、瓜割清水の隣接地が公有地化されたのに伴い、平成11年発掘調査を行ったが、清水の見学に便宜をはかるため、この第106次調査区（瓜割流地係）350㎡についても整備工事を実施した。

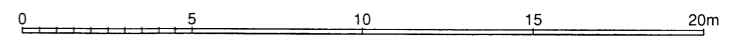
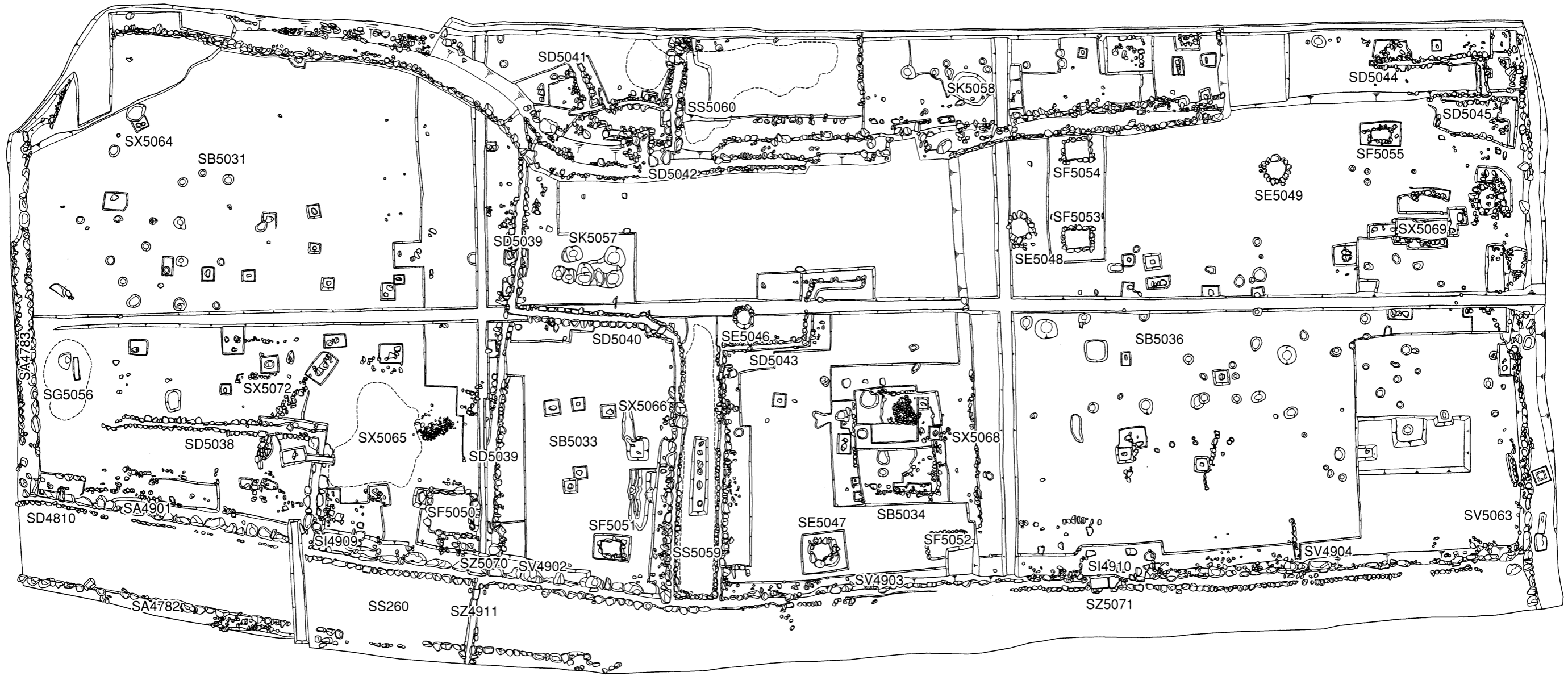
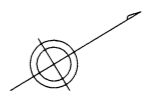
以上、事業内容の詳細については各項目を参照。

調査回数	調査箇所	調査期間	面積	調査理由
110次	福井市東新町	5月8日～7月31日	1,000㎡	中山間地域総合整備事業
111次	福井市西新町	7月3日～7月31日	150㎡	中山間地域総合整備事業
112次	福井市城戸ノ内町 字雲正寺	4月2日～12月27日	2,000㎡	計画調査
環境整備箇所		整備期間	整備事業内容	
福井市城戸ノ内町字中惣		9月25日～11月8日	建物跡・土塁・濠跡等の整地舗装・造成、植栽、説明板設置	
福井市城戸ノ内町字瓜割流		9月25日～10月25日	ソイルセメント舗装、園路造成、植栽	

表 1 平成13年度事業概要一覧



第2図 第112次発掘調査位置図 (S=1/2000)



第3図 第112次発掘調査遺構全測図

2. 第112次発掘調査

本年度調査地区は、先に述べたとおり一乗谷川の西側、八地谷扇状地の裾野に位置する。南側は斎藤兵部少輔など有力武将の屋敷が並ぶ地区に隣接し、東側は赤淵・奥間野地区と平井地区を結ぶ南北道路に面する。また北側は八地谷を流れる小川に接している。本地区は字名が「雲正寺」であるが、発掘の結果、寺院の区画ではなく、中規模武家屋敷2区画のほか南北道路から八地谷へ入る東西小路と、それに面した町屋3区画が発見された。八地谷は昔から「八地千軒」の通称で呼ばれ中小規模屋敷が集住する地区と考えられてきたが、発掘調査によって中規模武家屋敷や町屋が確認されたことで八地谷地区の一端が明らかとなった。

八地谷地区

調査面積は2,000㎡を測るが、上層遺構は調査区全体にわたって耕作による削平を受けており、谷川に接している北側ほど削平の度合いが大きい。しかし、石積施設や井戸・溝などの下層遺構を検出した。以下、主な遺構の概略を報告する。

遺構（第2～4図、P.L. 1～4）

武家屋敷 I

この屋敷は月見櫓の北東下に位置し、南を土塁石垣SA4783に、北を溝SD5039に区画され、東側は南北道路SS260に面する。敷地は東西約22m×南北約24mで、遺構は少なくとも2期に区分できる。上層で礎石建物を検出したが削平のため規模は不明。下層からは掘立柱建物を検出した。本調査区の南側でこれまでに発掘されてきた武家屋敷と比較すると、屋敷の奥行きが狭く敷地が小さい。また、平井・斎藤地区の武家屋敷の区画は土塁石垣で仕切られていたが、第112次調査区では土塁石垣は南側のSA4783しか確認できず、構造に違いがみられた。土塁石垣については、上層遺構の削平によって検出できなかった可能性も考えられるが、敷地面積からみて、平井・斎藤地区の重臣クラスの武家屋敷よりは規模の小さい、中規模武家屋敷と考えられる¹⁾

中規模武家屋敷

SA4783 第104次調査で既に確認されていた土塁で、本調査で西端の月見櫓への取付き部分を検出した際、青磁瓜形瓶を半裁した形の懸花生・青磁盤など、輸入陶磁器がまとまって出土した。

SB5031 下層の掘立柱建物で柱間は7尺を測る。上層に礎石建物が重なって検出したが、攪乱のため上、下層ともに正確な規模は確認できない。

SD5038 庭の遺構と考えられるSG5056から北へ向かって流れる石組溝で、途中で東に折れて門SI4909の南辺から南北道路の側溝SD4810に合流する。溝幅は0.2～0.3mで、長さ16m余り検出した。

SD5039 調査区内を西から東に向かって流れ、暗渠SZ5070を通過して南北道路側溝SD4810に

1) 中規模武家屋敷については『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』VI 1997参照。

接続する。石積施設SF5050も暗渠SZ5070へつながる構造になっているので、後世には溝はSD5040につながるように改変され、最後までは機能していなかったとも考えられる。

SF5050 2m四方の石積施設で、暗渠SZ5070へ排水する構造になっている。

SI4909 南北道路側に作られた門で、入口は階段になる。

SX5064 焼土塊が詰っており、炉の遺構と考えられる。鉄滓など生産に関わる遺物は出土しなかった。

SX5065 門SI4909から屋敷に入って広がる広場的な空間で、砂利敷になっている。

武家屋敷Ⅱ

東側は南北道路SS260に面し、笏谷石の切石を敷いた門SI4910が設けられる。上層は削平が激しく、屋敷を仕切る土塁や溝が検出されなかったため区画は不明。下層からは大型の掘立柱建物SB5036を検出した。

SB5036 門SI4910を入った正面に位置する掘立柱建物で、柱穴から約8.7m×6.3mの規模と推定される。上層に礎石建物の遺構が重なって検出されたが、規模は確認できなかった。

SD5044 調査区北西部で約6.0mにわたり検出された。八地谷の谷川へ向かって傾斜しており、途中で削平されてしまっていた。

SD5045 SD5044に平行する溝で、八地谷の谷川へ向かって流れる。

SE5048 内径約0.9mを測る。1.5m北側に位置する石積施設SF5053が1石しか石が積まれていないので、この井戸も上部が攪乱を受けていると思われる。

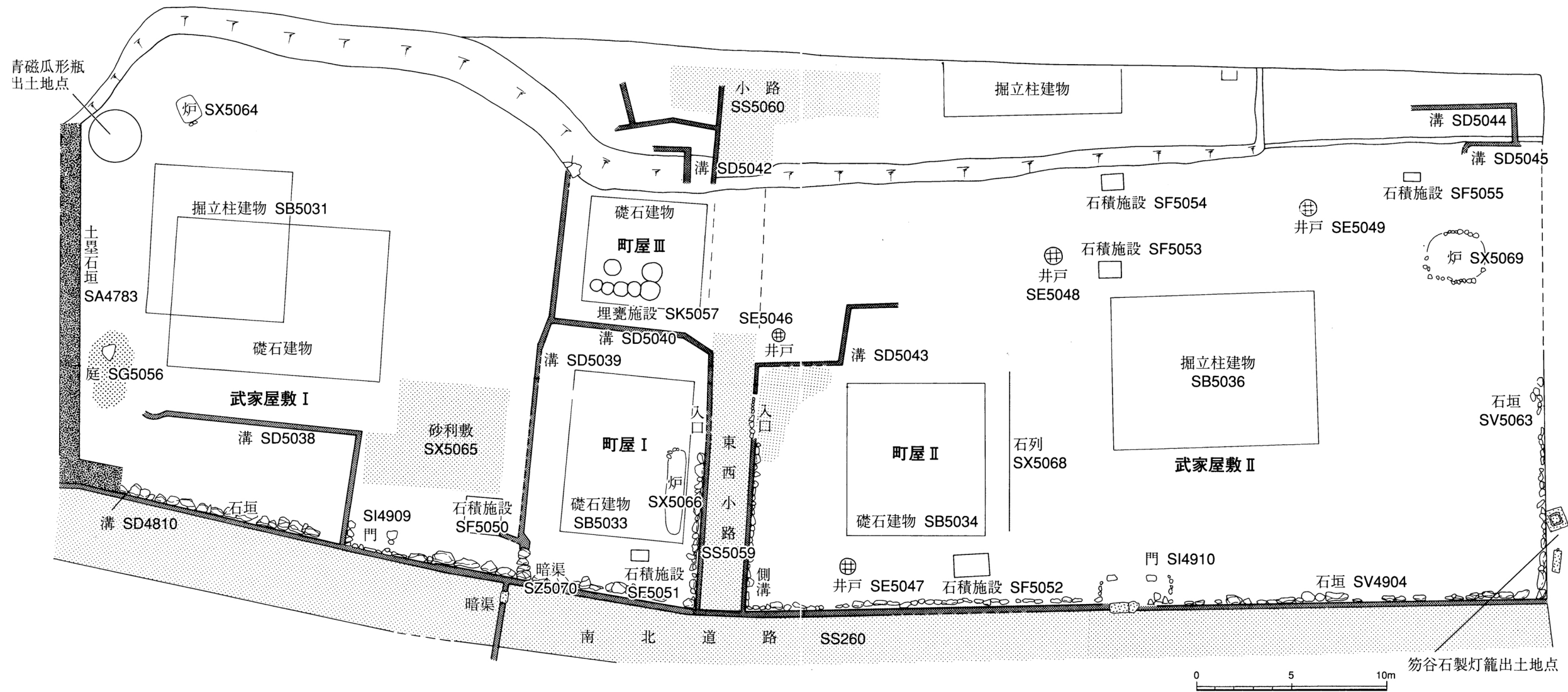
SE5049 井戸SE5048より約13m北側で検出。内径は約0.9mを測る。

SF5053・5054 SE5048付近で並んで検出した。どちらも1石しか石積みが残存しておらず、上部が削平されている。大きさは約1.4m×1.0mでほぼ同じである。

SF5055 SX5069の西側で検出された石積施設。石積は1石しか残っていない。

SI4910 南北道路の側溝SD4810に笏谷石の切石をかぶせて暗渠にして階段を造る。門柱の礎石も検出された。

SV5063 当初は南北道路SS260に交差する東西道路の石垣かと思われたが、石垣は南北道路を横切って検出され、SV4904よりも深く、下から積み上げられており、道路遺構は検出され



第4図 第112次発掘調査遺構模式図

なかった。そのため、この石垣は八地谷の小川の護岸と考えられる。川底からは笏谷石製の灯籠が出土した。

SX5069 内径約2.5mを測る楕円形の石積遺構。上部は削られており、石積みは1～2石しか残っていなかった。内部には焼土が詰まっており、炉の遺構と考えられるが、遺物はあまり出土しなかった。

町屋Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

南北道路につながる東西小路SS5059が検出され、それに面した町屋3区画を確認した。町屋Ⅱと武家屋敷Ⅱを区切る明確な遺構は確認されなかったが、石列SX5068を境として遺構面にレベル差があり、SB5034に付属する施設として、井戸SE5047・石積施設SF5052が検出されたので、武家屋敷の区画と町屋の区画に分かれるものと推定した。しかし、東西小路SS5059に面して設けられた町屋Ⅱの入口は、当初機能していたと思われる側溝SD5043を壊して造られているので、初期の屋敷割は町屋Ⅱを含めた南北約41mを測る区画であったが、後に一部が分割されたと考えられる。同様に武家屋敷Ⅰと町屋Ⅰ・Ⅲも、溝SD5039で仕切られているが、当初は一つの屋敷の区画であった可能性がある。初期の町割が後期に細分化される事例は、平井地区でも確認されている²⁾。

SB5033 東西小路南側の東西13m×南北9mを測る区画(町屋Ⅰ)で、北側に入口が設けられるが、礎石建物SB5033の規模は不明。屋敷内からトイレと推定される石積施設SF5051と、炉跡と思われるSX5066が検出された。工房跡と考えられるが、関連した遺物は出土しなかった。

SB5034 建物は南北4.2m×東西5mを測る。遺構全体が焼土覆われており、下層の建物を整地し建て替えられている。下層からは炭ピットが検出された。北西部分は10cm前後の石を用いた石敷になっている。

SE5047 町屋Ⅱの石組井戸で内径1.0m。天端石も一部残っている。

SE5046 東西小路の北側の脇で検出。内径約0.7mと小さい。

SF5051 町屋Ⅰの区画で検出した石積施設で、0.9m×0.6mを測る。

SF5052 町屋Ⅱの区画で検出した石積施設で、越前焼壺などが出土した。

埋甕施設 **SK5057** 町屋Ⅲの埋甕施設で、大甕2・中甕5が据えられていた。ピット内からは越前焼の破片がまとまって出土したが、底部が据わった状態で出土した甕はなかった。屋敷の区画は、東・南は溝を境としているが、西側は下段と上段の境界部となっており、攪乱されているため正確な区画の大きさは不明。

東西小路 **SS5059** 八地谷の地形に合わせて、西に向かって登る幅約2.7mの坂道で、傾斜は4～5度で、長さ15mを検出した。両側に側溝SD5040・5043が設けられるが、後に側溝を壊し、町屋の入口が増設される。道路面は砂利を突き固めて造られているが、後に粘土と砂利を重ねて補修工事している。上段からも、SS5059にT字形につながる道路SS5060と側溝SD5040と直線的につながる溝SD5042が発掘されており、後世削平を受けて分断されたと考えられる。

(宮永一美)

2) 区画の細分化については『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』V 1995参照。

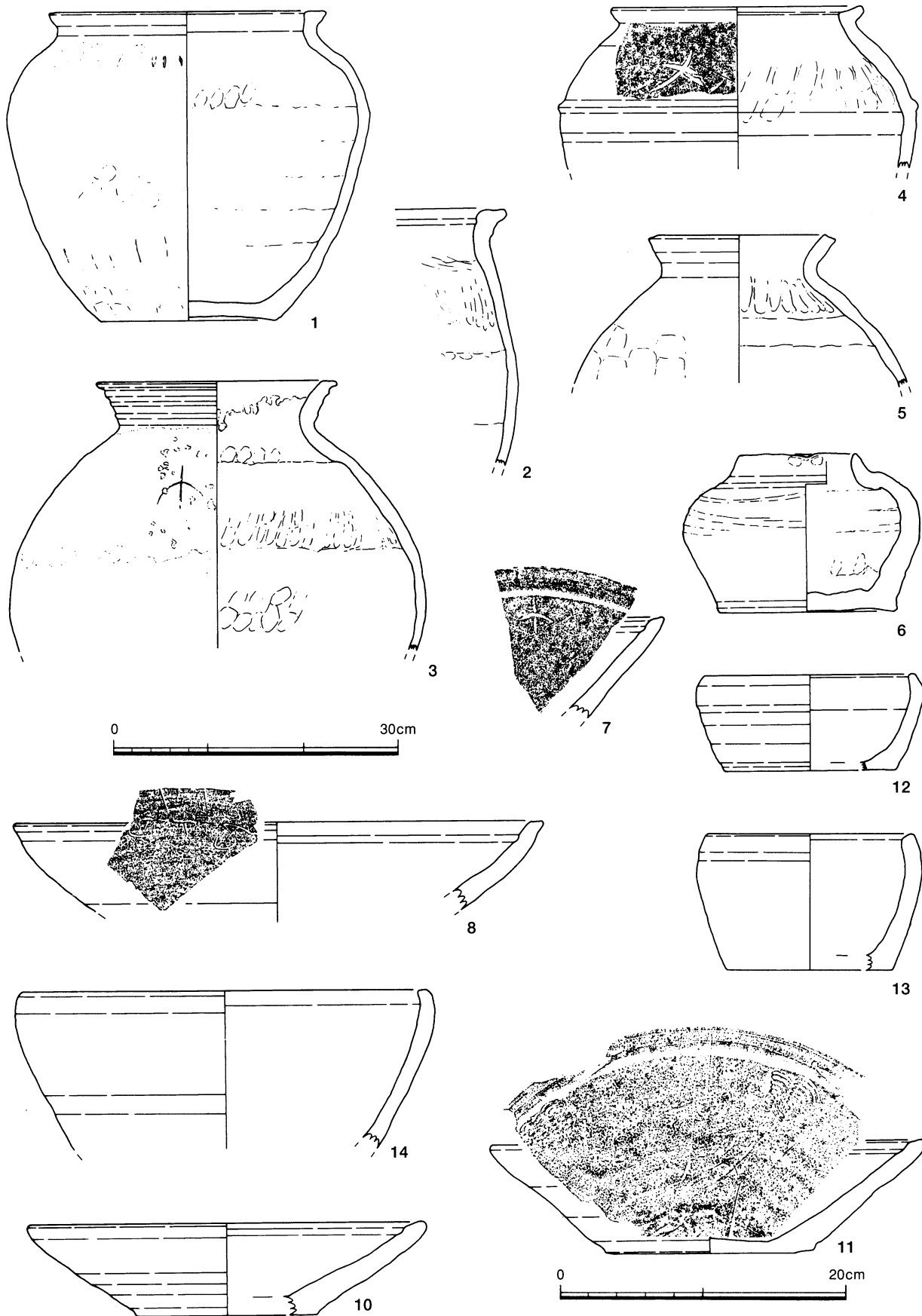
遺物（第5～9図、P.L.5～7）

第112次調査で出土した遺物の総数は6,423点である。内訳をみると日本製陶器が5,083点で79.13%を占める。細かくみると越前焼2,491（38.78%）、土師質土器2,462（38.33%）、鉄釉62（0.96%）、灰釉52（0.81%）、瓦質土器13（0.20%）となる。中国製陶磁器は888点で13.82%を占め、青磁323（5.03%）、白磁289（4.50%）、染付227（3.53%）となっている。その他は金属製品57（0.89%）、石製品278（4.33%）、木製品8（0.12%）の割合であった。調査面積は2000㎡であり、1㎡あたりの遺物点数をみると3.21点/㎡で、割合としては非常に少ない。上層遺構が削平を受けていたことが理由として考えられるが、調査区南西角からは青磁がまとまって出土しており中国製陶磁器の割合は低くない。むしろ土師質土器の点数が他の調査区と比較して少ないため全体として出土点数が少なくなっている。

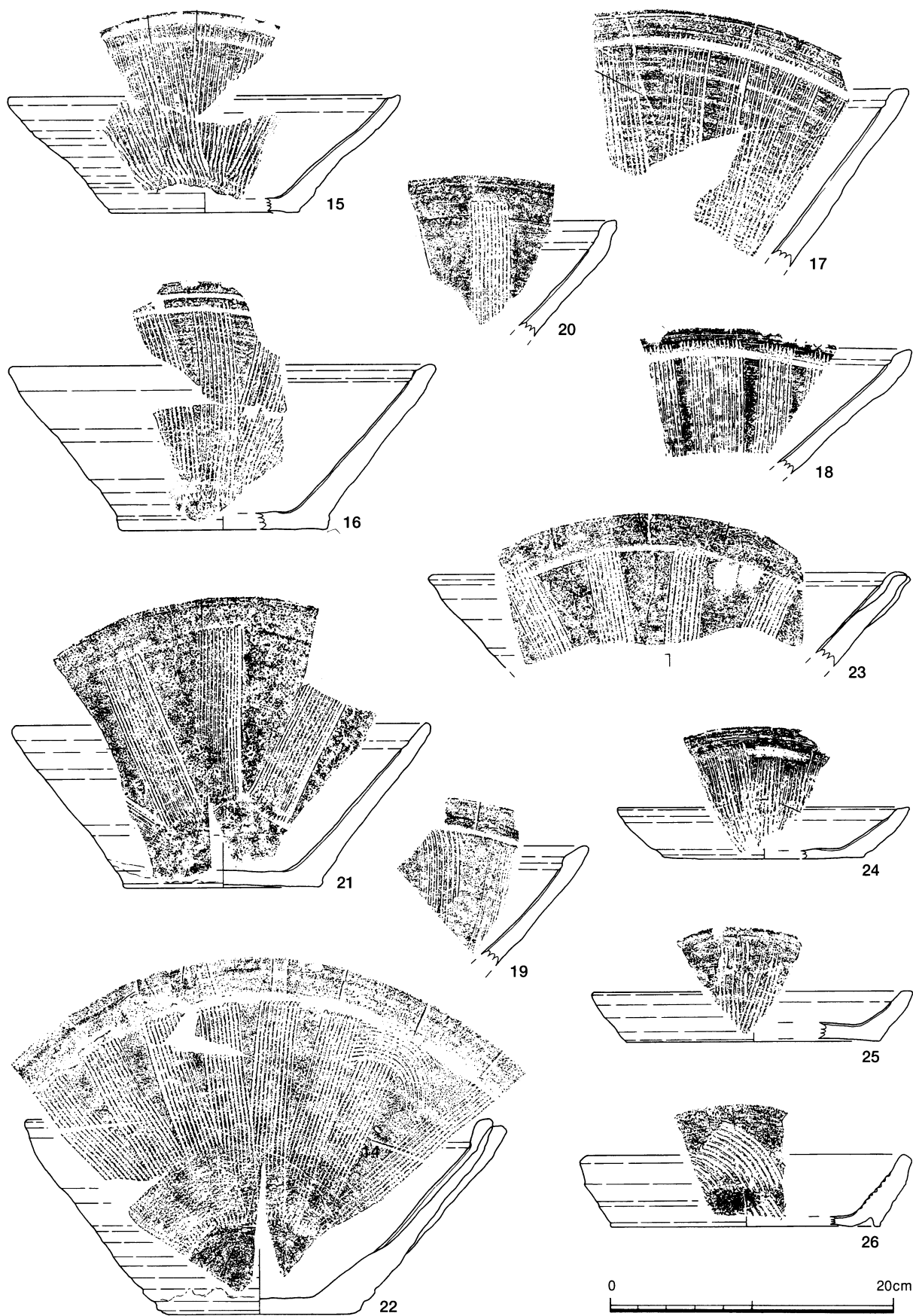
出土遺物内訳

器種	点数	%	器種	点数	%	器種	点数	%		
日本製陶器	越前焼	甕	1,594	中国製陶磁器	碗	77	金属製品	銅銭	15	
		壺	294		皿	130		釘	37	
		鉢	109		香炉	17		小柄	1	
		播鉢	478		鉢	22		銅製品	1	
		卸皿	3		盤	15		ピン	1	
		桶	10		壺	33		その他	2	
		その他	3		瓶	25		計	57	0.89
	計	2,491	その他		4	バンドコ		94		
	38.78	計	323		5.03	板石		16		
	土師質	皿	2,437		白磁	碗		4	白	7
		土釜	19			皿		266	茶臼	4
		土鈴	1			坏		19	硯	16
		土錘	1		計	289		4.50	砥石	10
		その他	4	染付器	碗	60		盤	29	
		計	2,462		38.33	皿		150	井戸杵	16
		鉄製釉	碗		40	坏		11	玉石	12
	皿		1		壺	3		いろり石	5	
	壺		16	鉢	3	火炉		4		
	瓶		3	計	227	5				
	鉢		1	中国壺・その他	49	0.76		灯笼	5	
その他	1		小計	888	13.82	火鉢	6			
計	62	0.96	朝鮮・その他	10	石仏	1				
陶器	碗	15	近世・その他	63	猿手	1				
	皿	20	須恵器	4	水晶	1				
	香炉	1	土師器	11	炉壇石	7				
	鉢	13	縄文土器	10	自然石	1				
	壺	3	小計	98	1.53	石龕	1			
	計	52	0.81	石製品	捏鉢	1				
	瓦質	香炉	2		チャート片	1				
		火鉢	8		その他	40				
		仏花瓶	1		計	278	4.33			
		瓦燈の蓋	1		木製品	炭	7			
その他		1	容器の台			1				
計	13	0.20	計		8	0.12				
信楽	1	その他	壁土		11					
国産・その他	2		計		11	0.17				
計	3		0.05		小計	354	5.51			
小計	5,083	79.13	合計	6,423	100.0					

表2 第112次調査出土遺物一覧



第5図 第112次調査出土遺物(1)



第 6 図 第112次調査出土遺物 (2)

越前焼

越前焼のうち約6割が甕の破片だが、これは東西小路SS5059に隣接する埋甕施設SK5057から出土したものが多く、甕ピットから7基据えられていたことがわかるが、ピット内に甕の底部が抜かれずに残っているものはなかった¹⁾

1～3はSK5057から出土した。1の小甕は口径28.7cm、器高32.3cmを測る。2は口縁部が厚いIV群cの大甕。3は口縁部がやや外傾しながら立ち上がる壺で、口径25.0cmを測る。肩部まで降灰があり卍のヘラ記号を有す。4は口径17.6cmを測る広口の壺で肩部に「大」の文字がヘラ書きされる。5は口径12.9cmを測る壺で、胎土は灰色を呈し外面は叩き締めて調整されている。6は無頸の壺で口縁部には片口が作られる。口径8.0cm、器高11.1cmを測り、胎土は暗褐色を呈し、焼成良好で外面の肩部にかけてナデがみられる。7は内面に卍のヘラ記号を持つ鉢。8は口径37.2cmを測り外面口縁にヘラ書きが施される。9は口縁部が内湾する鉢。10は口径28.0cm、器高6.4cmを測る平鉢。11は口径30.6cm、器高7.8cmを測る平鉢で赤褐色の色調で焼き締まっている。12～14は口縁部が内湾する鉢。12は口径14.6cmの小型の鉢で焼成不良。15～19は口縁が傾斜し播目が密に入るIV群の播鉢である。15は口径27.6cm、器高8.2cmを測り胎土は灰黒色で焼成良好。16は口径30.0cm、器高11.5cmを測る。20はⅢ群aの播鉢で10条1組の播目を持つ。21は口径29.4cm、器高11.4cmを測るⅢ群aの播鉢で、14条1組の播目を有する。22・23は口縁断面が四角いⅢ群bの播鉢で片口が作られる。22は口径33.0cm、器高13.6cmを測り10条1組の播目を持つ。24～26は卸皿で、24は口径20.6cm、器高3.6cmを測り播目が雑に施される。26は口径23.4cm、器高5.0cmを測り、底部は高台状に成形される。内面には弧状に播目が入られ、胎土は灰黒色を呈し黒褐色に焼きあがっている。

土師質土器

土師質土器は皿が2,437点、土釜が19点、土鈴・土錘も1点ずつ出土した。全体に占める割合は38.33%で、南に隣接する104次調査区などと比較すると点数・割合ともに少ない。

27～39はC類の皿である。27は口径5.8cm、器高1.5cmと小型だが口縁にはタール痕がある。37はタール痕がなく口径9.3cm、器高2.3cmを測る。厚く仕上げられ外面も丁寧に指で押し整形されている²⁾

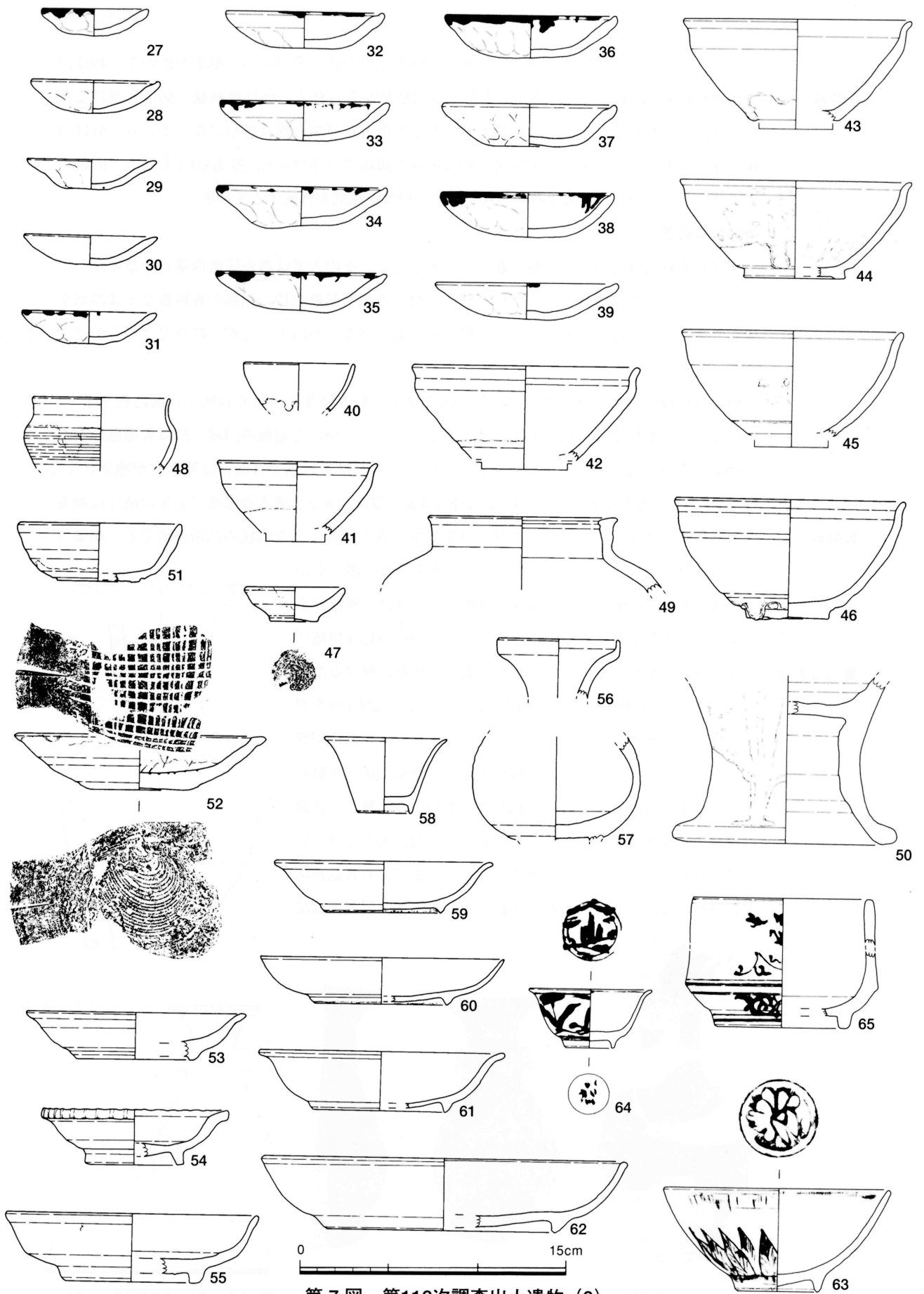
瀬戸・美濃焼

鉄釉では碗のほか、壺や大型の仏花瓶の一部と思われる破片が出土した。灰釉では碗・皿や卸皿が出土した。

40は口径6.0cmを測る小型の鉄釉碗。41の鉄釉碗も小型で口径8.7cm。42の鉄釉碗は口径12.3cmを測り釉薬は黒く発色し胎土は赤みを帯びている。43は厚くかけられた釉薬が釉垂れをおこしている。44は白濁した黄釉がかかる黄天目。鉄錆が塗布された上から黄釉が斑にかけられる。45の鉄釉碗は胎土が白っぽくボソボソしている。46の飴色がかかった茶黒色の鉄釉がかかる碗で、口径12.5cm、器高6.5cmを測る。高台は輪高台で釉薬が垂れて砂が固まって付着している。47は口径5.5cm、器高1.9cmを測る小型の皿。内面は鉄釉がかかるが外面は露胎になっている。48は鉄

1) 越前焼大甕・播鉢の分類は、『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』1983参照。

2) 土師質皿の分類は『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』I 1979参照。



第7図 第112次調査出土遺物 (3)

仏花瓶

釉小壺。口縁は広口で外面は横方向に沈線が細かく引かれ、その上から釉葉がかかる。49は口径10.2cmを測る鉄釉壺で、内外面とも釉葉は火脹れがみられる。66は鉄釉瓶。50は大型の仏花瓶の底部と思われる。外面には鉄釉葉がかかるが高台及び高台内は露胎になっている。51は口縁が強く屈曲して立ち上がる灰釉皿。52は灰釉の卸皿で口径13.6cm、器高3.0cmを測る。灰釉は口縁部にのみかかり、底部は糸切されている。53は口縁部が外反する灰釉皿。

中国製陶磁器

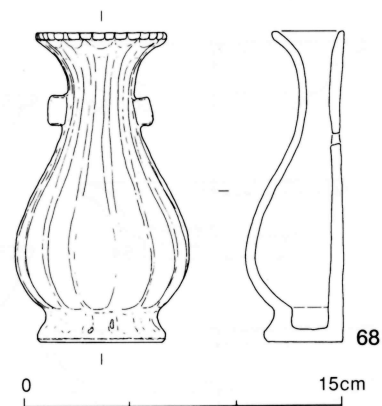
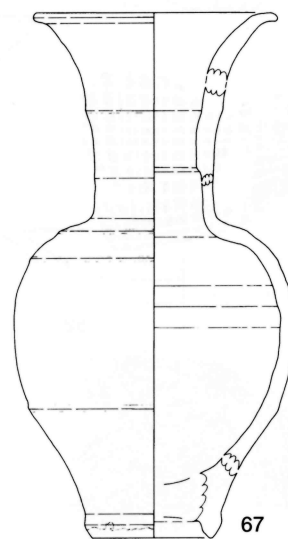
中国製陶磁器は青磁の皿・盤・瓶などが出土した。その大半は調査区南西隅の土壘際から出土したもので、背面が垂直に作られた懸花生型の青磁瓜形瓶や長い頸部の青磁瓶などは器形を復元できた。白磁は皿が多かった。染付は碗・皿・坏などが出土したが、接合できるものは少なかった。

青磁瓶

54は青磁稜花皿で口径10.2cm、器高3.0cmを測る。釉葉は薄くかけられ胎土は黄白色を呈す。55も青磁皿だが胎土は灰色で堅緻に焼きあがっている。56は青磁瓶の口縁。57は青磁瓶の胴部で釉葉は内外面とも激しく火脹れをおこしている。71は青磁瓶で外面には算木文が施される。「経筒花生」とも呼ばれるもの。67は口径11.4cm、器高24.8cmを測る青磁瓶で大半の破片は調査区南西角から出土した。頸部・胴部には筍花生でみられるような節状の凸帯がめぐる。釉葉は美しい緑色に発色しているが、一部激しく火を受けて溶けか

青磁瓜形瓶

かった破片もある。68は同じく調査区南西角からほぼ一個体分まとまって出土した懸花生型の青磁瓶で、正面からの形は頸部に管耳の付く瓜形瓶だが、背面は垂直に成形され壁に懸けるための穴があく。口径6.0cm、器高14.7cm、胴部最大径は8.1cmを測る。横からの断面をみると背面の器壁の厚さ分だけ胴部径が厚くなっている。完形の瓜形瓶を半裁し、背面の粘土を貼り付けて成形し管耳も後で付けられたことがわかる。釉葉の色調は青白色を呈するが、色がくすんでおり二次的に火を受けていると思われる。一乗谷朝倉氏遺跡では、これまでも青磁角坏型の懸花生は出土しているが³⁾、半裁した形状の青磁懸花生は出



挿図1 青磁瓶・青磁瓜形瓶写真

第8図 第112次発掘調査出土遺物(4)

土例がない。このような半分に割った形のものとしては、第24次出土の銅製懸花生がある。

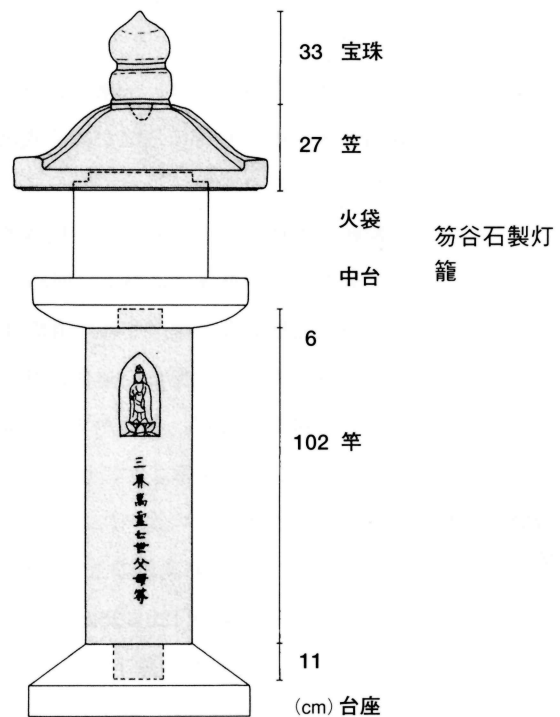
58は白磁の坏で口径6.6cm、器高4.1cmを測る。59・61は口縁部が外反する白磁皿。60は口縁が内湾する白磁皿で胎土は灰色で釉薬も灰色がかり細かく貫入が入る。62は口径19.8cm、器高4.0cmを測る皿で白磁の皿としては大きい。60と同じく口縁は内湾し胎土や釉薬の仕上がりも同様。63は口径12.3cm、器高5.7cmを測る染付碗で、外面には芭蕉葉文、内面には花文が描かれる³⁾。破片の割れ口には漆が付着しており補修して使用していたことがわかる。64は高台内に「福」の銘が書かれる染付坏。65は胴部が真っ直ぐ立ち上がる筒状の染付合子の身か。外面には唐草文が描かれ、内面は底部のみ釉薬がかかるが口縁部にかけては露胎になっている。69は碁笥底のC群染付皿で胎土は赤みを帯びて焼成不良になっている。70はB群の端反染付皿で外面には唐草文が描かれる。

石製品

石製品はバントコや白などが出土したが、大型のものでは、調査区北端から竿部に四方仏が半肉彫りされた笏谷石製の灯籠が出土した。

第112次調査区北端より出土した石造物は、石仏が彫られていたことから当初笠塔婆とも考えられたが、笠のほぞ穴と竿上部の凸部が組み合わないことから、組み合わせる部品が足りないことがわかり、県内の中世に造られた石灯籠と比較した結果、大きさ・形などに共通点がみられたことから石灯籠とした。宝珠・笠・竿の部分が出土したが、火袋や中台・台座は出土しなかった。宝珠が高さ33cm（凸部含まず）、笠が幅81cm、高さ27cm、竿部が幅34cm、高さ102cm（凸部含まず）を測り、組み立てれば、高さ2m以上の石灯籠であったと推定できる。竿部正面には「三界萬靈七世父母等」、左面には「元龜二年辛未七月十一日」と銘文が線刻され、朱を接着剤にして金箔が施されていた。銘文から朝倉氏滅亡の2年前、1571年に造立されたことがわかる。城下町の破壊とともに、倒され埋没したため、金箔の残る良好な状態で出土したと考えられる。

(宮永一美)



挿図2 石灯籠模式図



挿図3 石灯籠出土状況写真

3) 第86次発掘調査（西山光照寺）で出土。

4) 染付の分類は「15.16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 1982参照。

3. 環 境 整 備

本年度は一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査・環境整備事業の「中期10箇年計画」に基づき、平成2年度の第68次発掘調査地（中惣地係）2,000㎡について、平成13年9月25日から11月8日にかけて整備工事を実施した。また平成11年度の第106次発掘調査地（瓜割流地係）350㎡について、平成13年9月25日～10月25日にかけて整備工事を実施した。なお両整備地とも、工事竣工後の11月9日に整備状況の写真撮影を行った。

第68次調査中惣整備工事

第68次発掘調査地は、一乗谷古絵図などから朝倉氏最後の城主義景の従兄弟にあたり、朝倉同名衆の中でも特に地位が高く式部大輔と称し、大野郡司も務めた朝倉景鏡の館跡と推定されるところである。

館跡の西側は、県道鯖江・美山線改良工事に伴い、昭和57年に第43次発掘調査が行われたが、発掘された遺構は道路下に埋められている。

第68次発掘調査で検出された遺構は、礎石建物5、土塁2、濠2、石組溝3、石敷道路3などである。遺構の残存状況は、全体に良いとは言えない。石敷建物の倉庫跡は直接展観するに相応しい遺構であるが、全体がすでに発掘排土で埋められており排水処理が難しく、真上に建物規模だけを表示することにした。

建物跡の整備

建物跡は建築方位の違いにより、ソイルセメント舗装とレミファルト舗装の2種類とした。舗装は厚さ7cmの碎石基盤の上に、厚さ5～6cmで施工した。縁取りは前者には茶色のアスファルトブロック（240×120×25mm）、後者には黒色のアスファルトブロックを用いた。建物跡4、5については、建物が道路下の方に広がっており西端まで整備できないので、建物端と誤解されないよう、西辺にはアスファルトブロック境界工を施していない。

建物跡の周囲は、イベントなどの際に大勢の人が集まれるように、整地の高麗芝張りとした。

土塁跡の整備

館跡の北と南で濠跡と土塁跡が発掘調査で確認され、館の南北規模が判明したので規模が具体的に分かるように、土塁は盛土して整備することにした。因みに計画幅と考えられる30丈（90.9m）は土塁の中どうしにおさまる。土塁の高さは不明であるが、北土塁は屋敷の内幅から1.0m、南土塁は既存する後世の石垣を含んで同内側から1.6mほどの高さで復原した。底幅は北土塁は7.3m、南土塁は6.6mほどにしてあるが、南土塁は前述の石垣の上の幅であるので、本来の底幅は7.5m位になるものと推定される。土塁斜面は発掘の土層断面から、館や上城戸の土塁と同じように屋敷の内側は40度、外側は急な50度の勾配と判断されたので、それぞれの勾配で粘質土に筋芝で仕上げた。土塁の上には塀か柵などがあったと考えられるが、

障壁をイメージしてドウダンツツジの列植とした。塀の外の犬走りは狭く、内側の武者走りは広いので、外側の土塁端から1mの位置に植栽した。高さ70～80cm、幅30～40cmのドウダンツツジを北土塁は45cm、南土塁は65cm内外の間隔で植栽している。

濠跡は平面的に表示することにした。発掘調査の結果を参考に、北濠は5.2m幅で、南濠は6.8mで復原した。北濠の南側の肩は未確認であり、推定の幅である。雑草が生えないよう、7～7.5cm厚の捨てコンクリート基礎にし、上面には水を象徴して4.5～5cm厚さの珪石敷とした。

濠跡の整備

南土塁の北側に近年作られた素掘りの排水溝を、発掘の排石を側石に使用して改修した。延長25.6m、内幅25cm、底は厚さ6cmのソイルセメント打ちとした。

整備地の中ほどに県道の歩道から降りられるように、発掘の排石を用いて幅2m6段の石階段を造成した。砕石基礎のモルタル据え付けで、蹴上げ15cm、踏面は30cmとした。

階段を降りた前方に、説明版を設置した。別畑石の基台（152×100cm）にスチール製固定板を据え、その上にシルクスクリーン印刷クイヤー焼き付け仕上げのアルミ板（1,210×770×3mm）を固定した。説明板には、第68次発掘調査遺構と道路下に埋められている第43発掘調査遺構を、建物跡などは赤色で、濠や井戸は青色で表示した。

説明板の設置

土塁跡や濠跡、倉庫跡に、花崗岩製の遺構表示石を設置した。大きさは35×30×20cm、前面と側面はこぼだし仕上げとし、上面を本磨きし文字を陰刻した。

第106次調査瓜割流整備工事

瓜割清水に隣接したところに公有地が確保できたので、清水の見学に便宜をはかるため、発掘調査の上環境整備をすることにした。

第106次発掘調査では、瓜割清水に関連すると考えられる遺構は検出されなかった。武家屋敷の一面と推定され、礎石建物2、石列、溝、通路状遺構、砂利敷面などが発掘されたが、いずれも断片的なもので、規模を表示できるほどには残存していなかった。

遺構を表示しているものと誤解されないように、曲線や不整形のデザインにより整備し、小公園緑地として活用することにした。

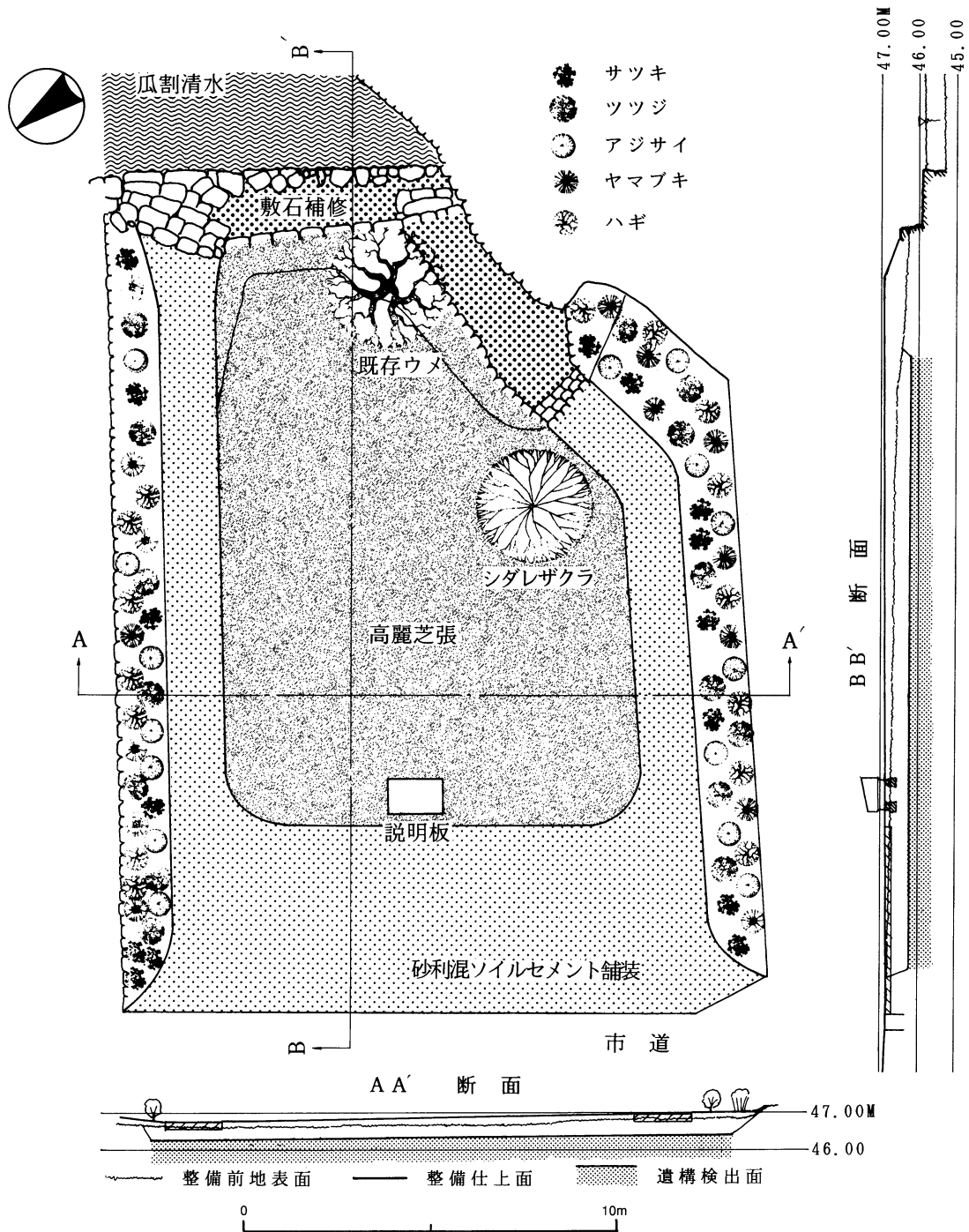
市道に沿っては、75㎡の小規模な砂利混りソイルセメント舗装（ソイルセメント10cm厚砕石基盤 5cm厚）の広場を、さらに清水側に広さ135㎡ほどの芝生広場を設けた。広場の両側には幅1.5mの砂利混じりのソイルセメント舗装の園路を造成、見学者を誘導し石階段を降りて、清水の利用と護岸を兼ねて後世作られたと推測される約10㎡の石敷テラスに至るようにした。北側の階段は既存のものを補修、西南側の階段は新設したものである。また石敷テラスも、隙間にソイルセメントを充填して補修した。

広場の造成

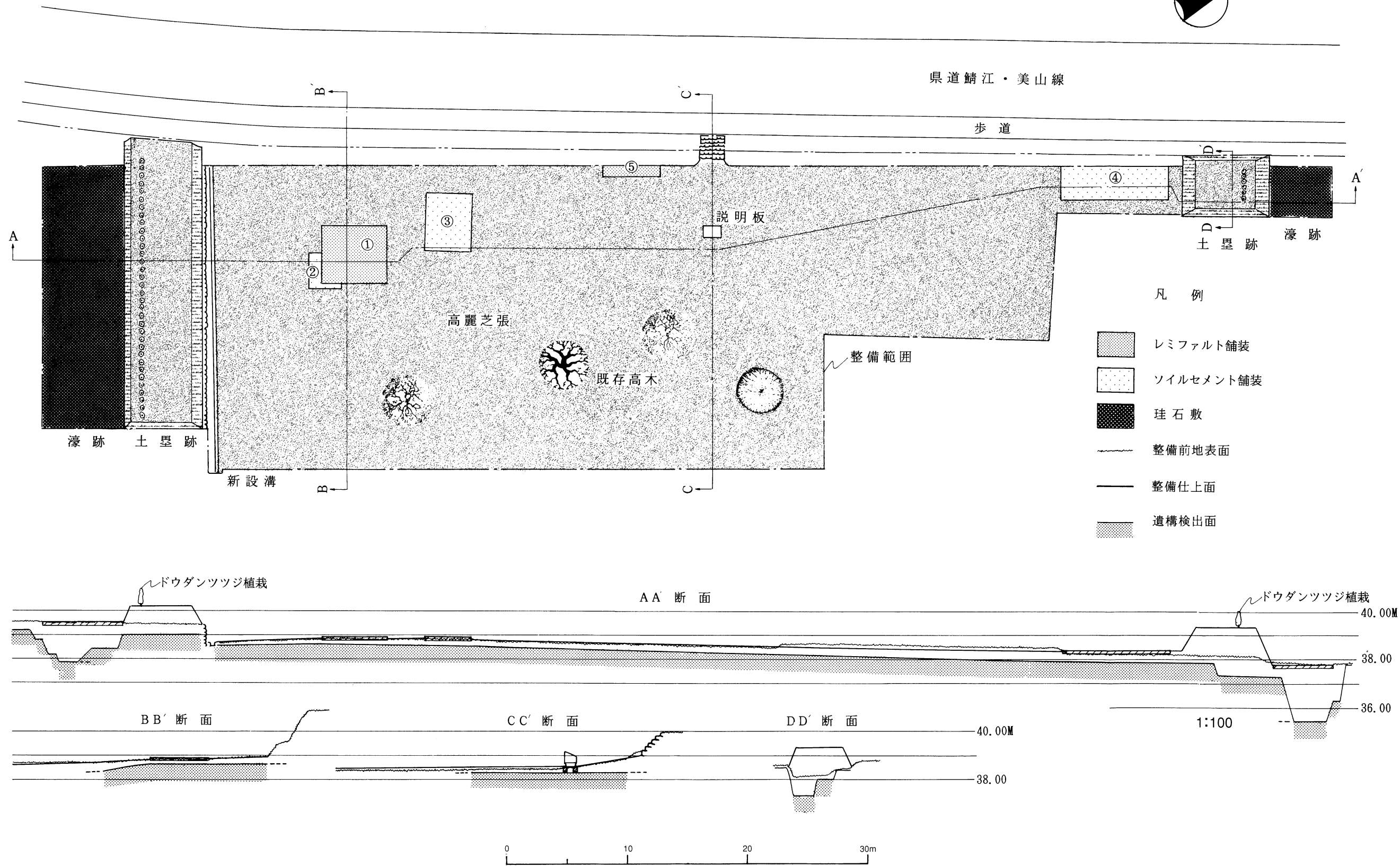
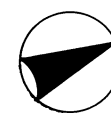
泥水などが清水に流入しないよう、階段を設けたり石敷テラスの西側や石敷園路の北側に1段の積み石をし、清水側が高くなるよう敷地造成している。北側の土留めや境界石も新設したものである。

樹木の植栽 園路の南側と北側には、四季の観賞用に低木を植栽した。やや大きくなるハギ（5芽立）は背後に、そのほかサツキ（高さ50cm、幅60cm）、ツツジ（高さ60cm、幅60cm）、ヤマブキ（10本立）、アジサイ（7本立）各15本を混植した。また既存のウメは剪定して残し、新たにシダレザクラ（高さ3.7m、幹周25cm）を1本芝生広場に植栽した。

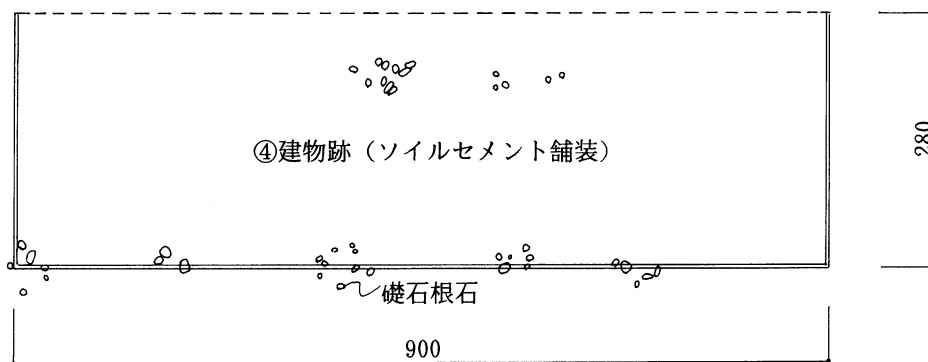
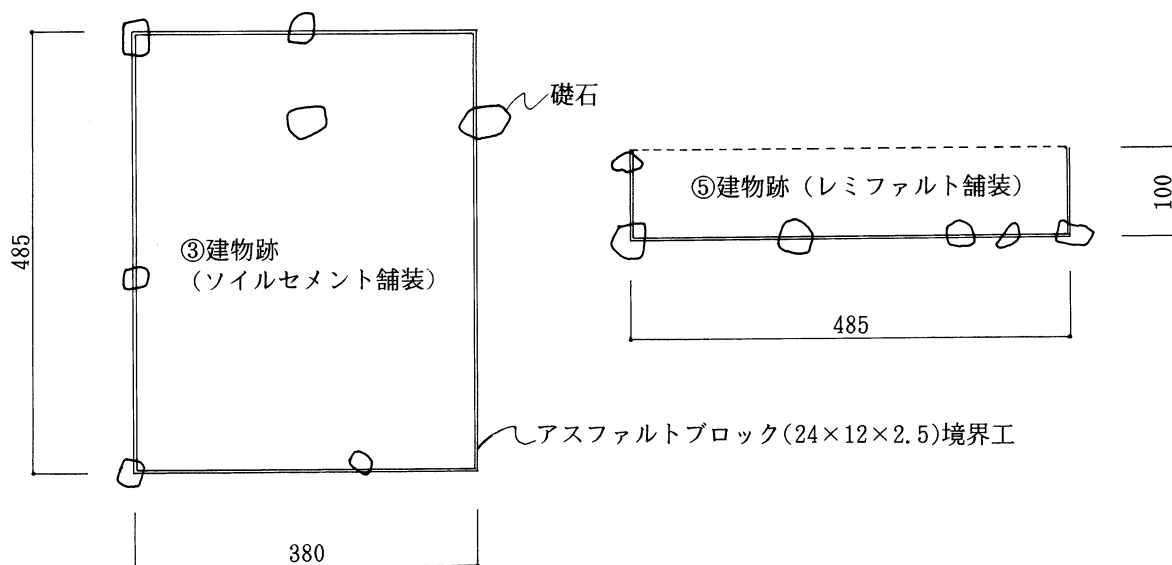
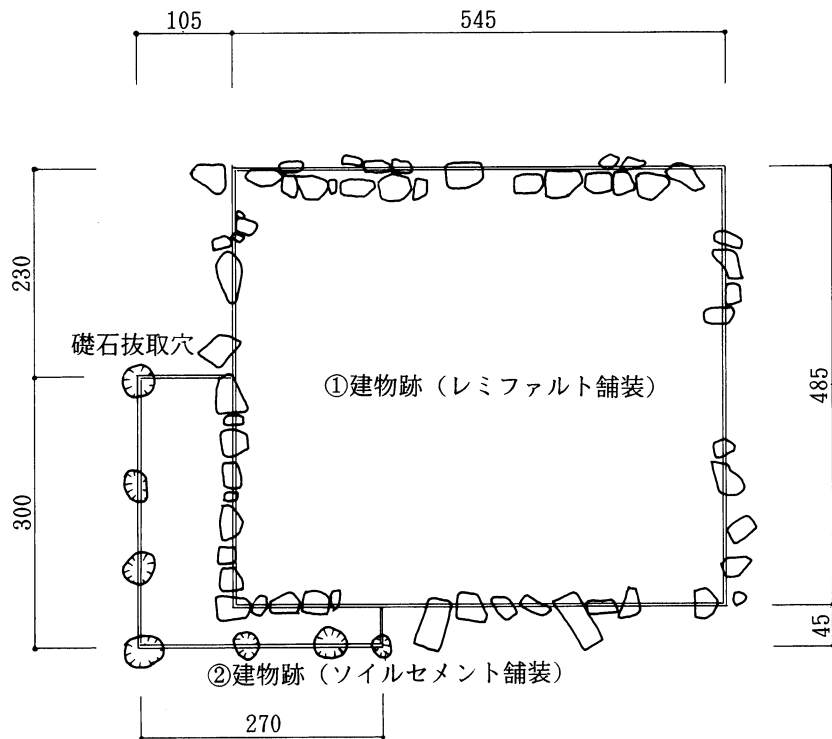
第68次整備地と同じ大きさの説明板を、芝生広場の西側に設置した。地形図には城下町中心部の主要遺構や発掘した道路跡、井戸跡なども表記し、義景館周辺の遺跡案内にも役立つようにした。 (藤原武二)



第9図 第106次調査瓜割流整備図



第10図 第68次調査中惣整備図

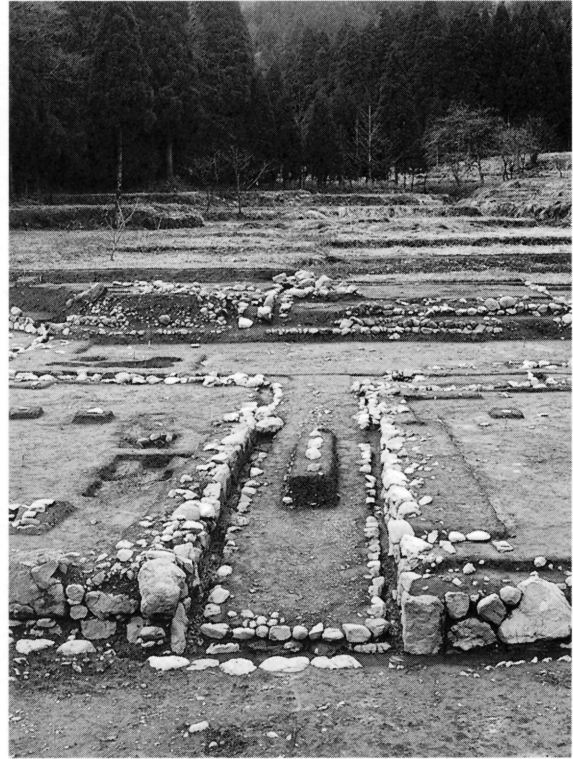


※寸法単位センチメートル

第11図 整備建物寸法図



調査区全景（南から）



SS5059 近景（東から）



調査区南半（北西から）



調査区北半（南西から）



SF5051・SK5057・SS5059・SX5066 遠景（東から）



SB5034・SE5047・SF5052 遠景（東から）



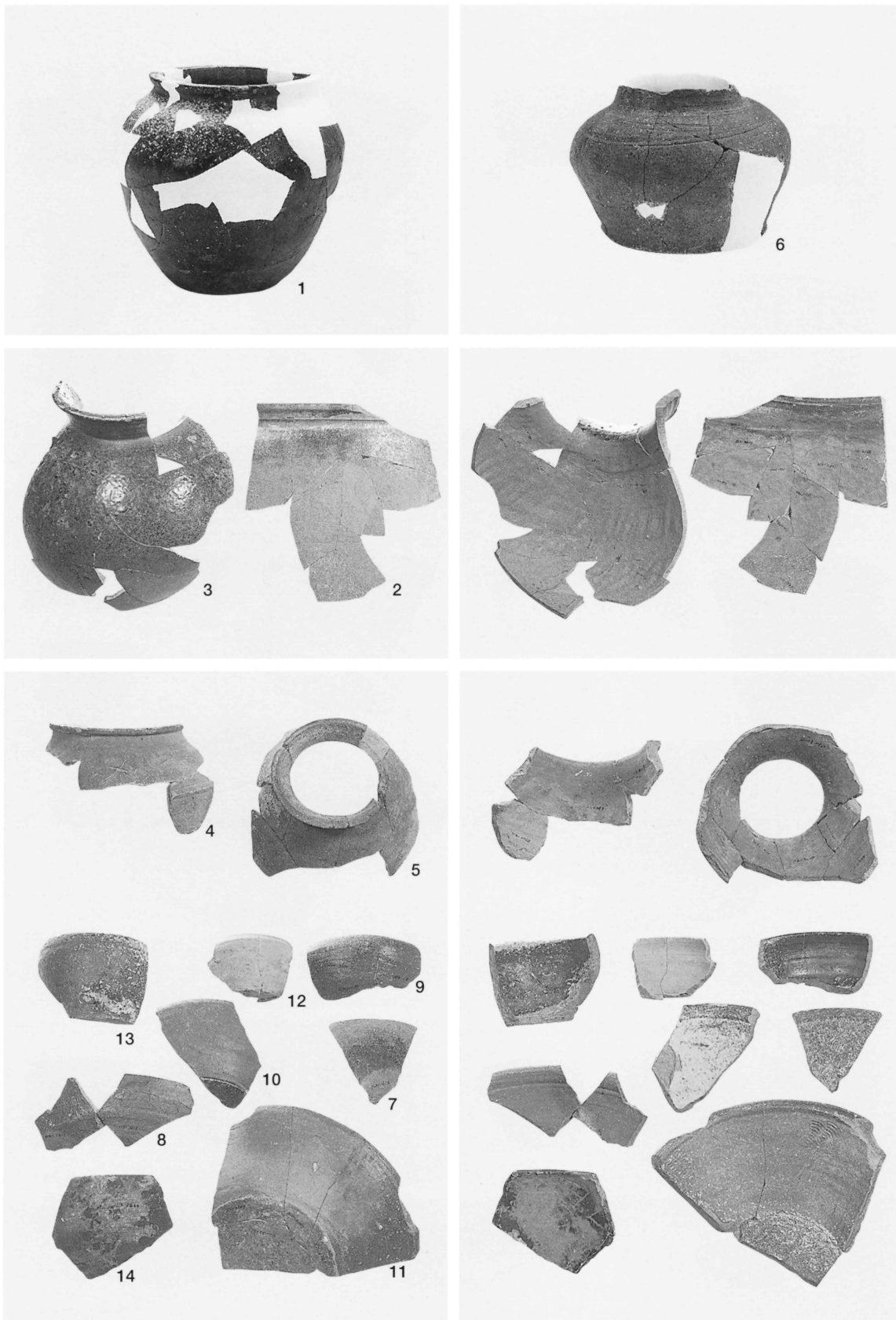
SF5050 近景（西から）



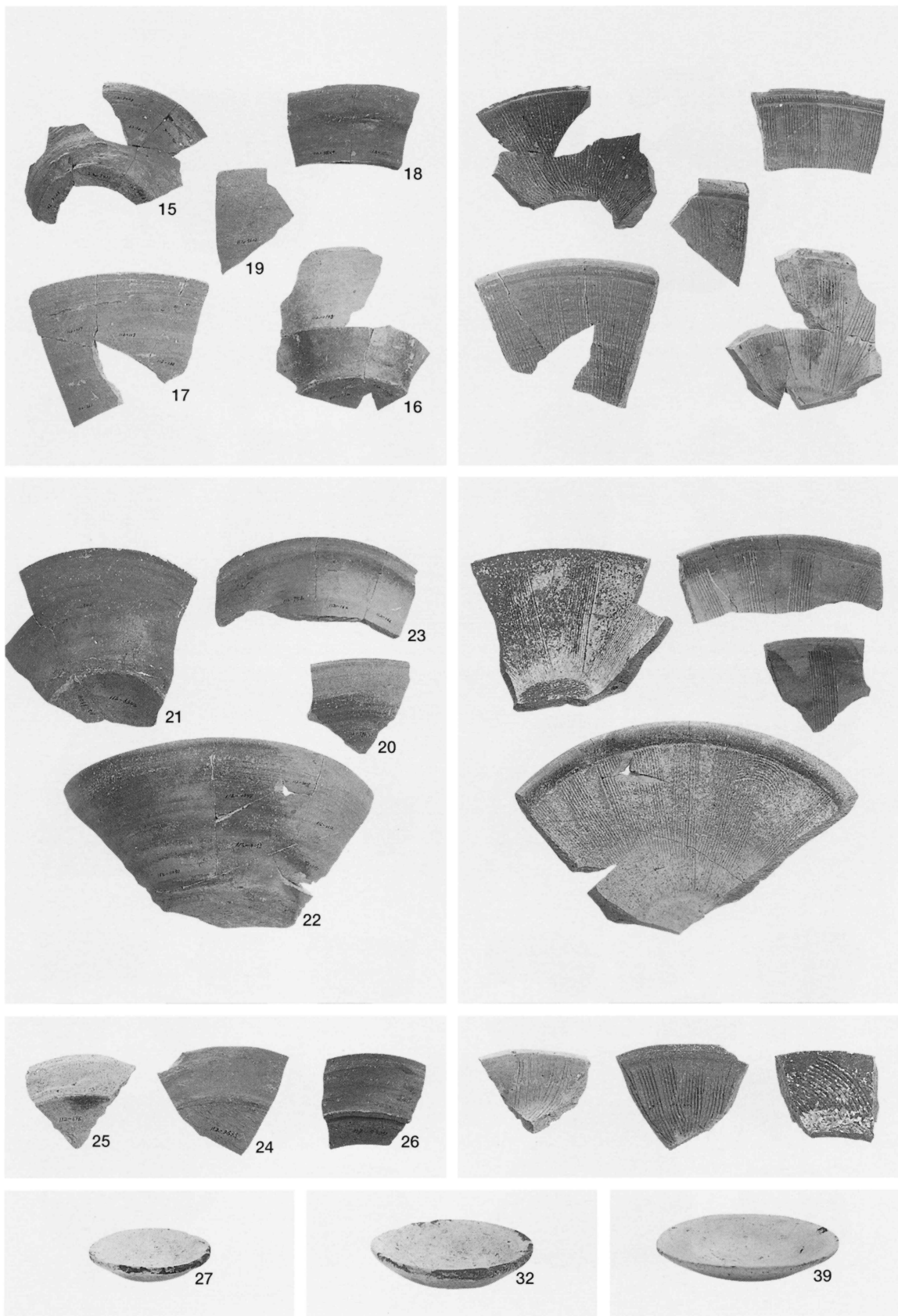
SI4909（東から）



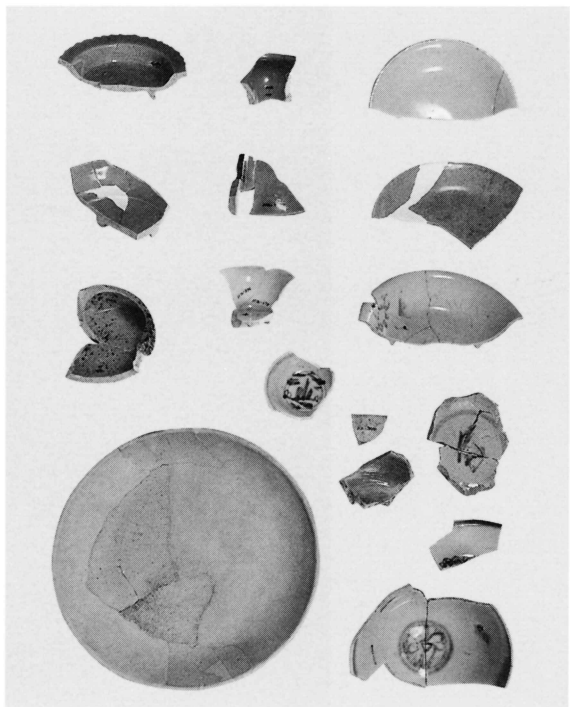
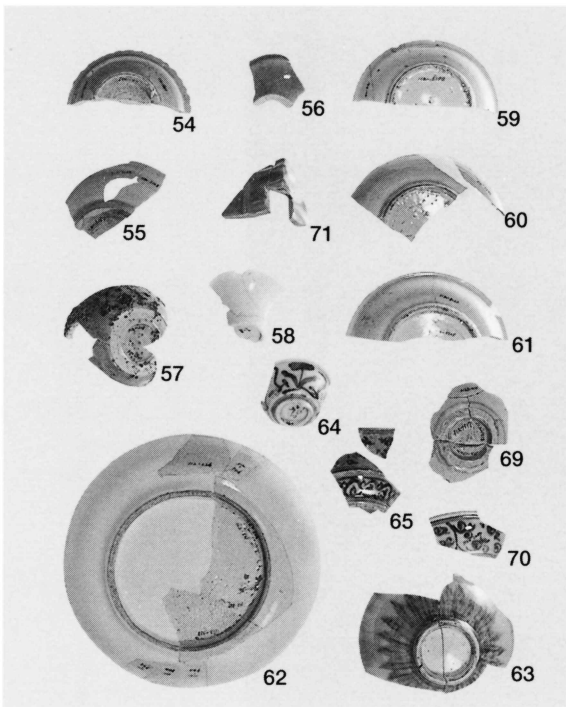
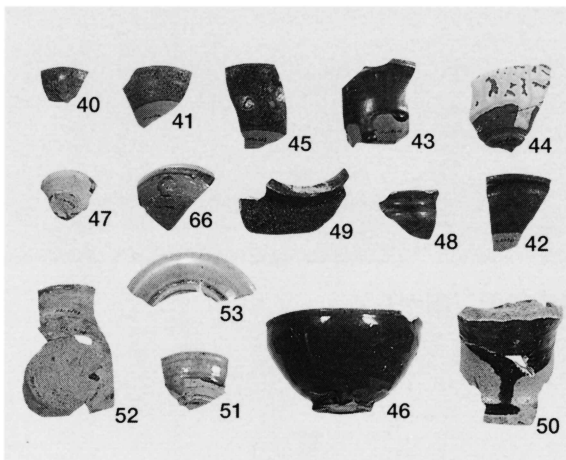
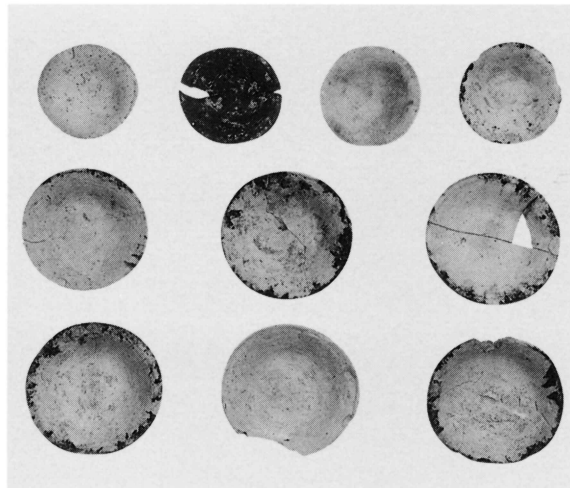
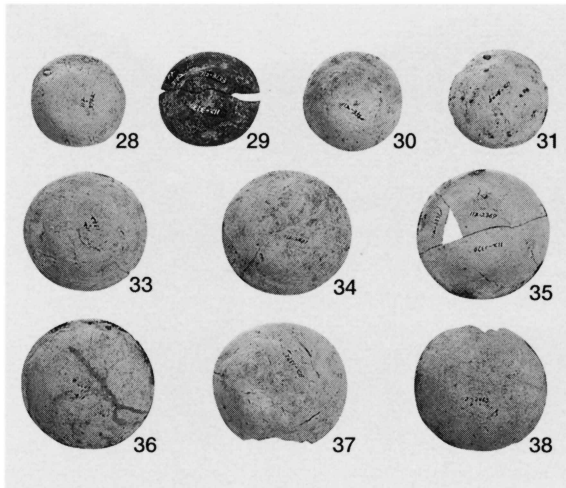
SI4910（東から）



越前焼甕1・2 壺3～6 鉢7～14



越前焼播鉢15～23 鈿皿24～26 土師質皿27・32・39



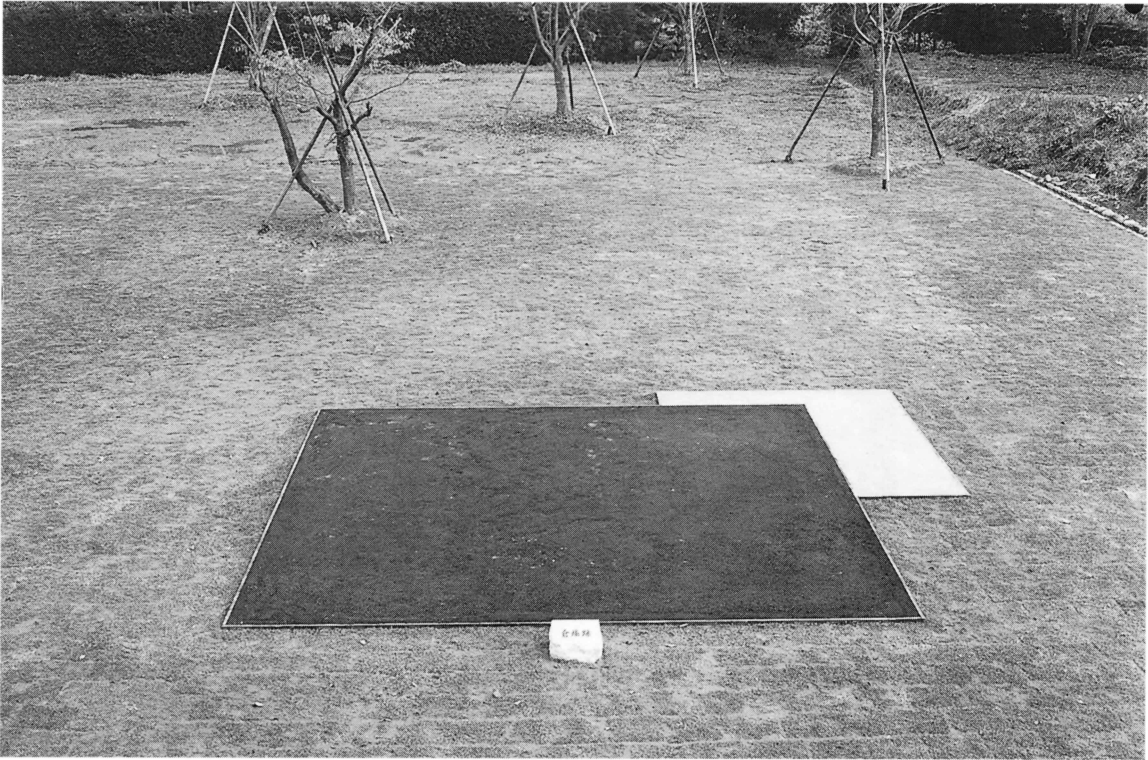
土師質皿28～31・33～38 鉄釉碗40～46 皿47 壺48・49 仏花瓶50 瓶66 灰釉皿51・53 卸皿52
 青磁皿54・55 瓶56・57・71 白磁坏58 皿59～62 染付碗63 坏64 合子65 皿69・70



第68次調査 中惣整備状況（南から）



第68次調査 中惣整備状況（北から）



第68次調査 中惣倉庫跡整備状況（西から）



第68次調査 中惣南側土塁・濠跡整備状況（西から）



第68次調査 中惣石階段・説明板設置状況（西から）



第106次調査 瓜割流整備状況（西南から）



第106次調査 瓜割流東側整備状況（南から）



第106次調査 瓜割流南側園路整備状況（西から）

報 告 書 抄 録

ふりがな	とくべつしせきいちじょうだにあさくらしいせき
書名	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡33
副書名	平成13年度発掘調査・環境整備事業概報
シリーズ番	33
編集者名	宮永 一美
編集機関	福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL0776-41-2301
発行年月日	平成14年3月31日

調査地区	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
第112次調査	福井市城戸ノ内町 字雲正寺	18210	史-31	36°00′ 03″	136°17′ 38″	010402～ 1227	2,000m ²	環境整備に伴う発掘調査

調査地区	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
第112次調査	武家屋敷	室町・戦国時代 (15・16世紀)	掘立柱建物2・井戸4 石積施設6・庭1 埋甕施設1・石垣1	越前焼・土師質土器 瀬戸美濃焼・中国製 陶磁器(青磁・白磁・ 染付)・石製品	武家屋敷2区画と 町屋3区画を確認 した。

特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡 33

平成13年度発掘調査環境整備事業概報

発行年月日 平成14年3月31日

編集・発行 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館©

印刷 河和田屋印刷株式会社